

第三百五十二回 青葉会

平成二十七年七月二十三日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明

小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 星田啓子 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄

渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章

福島正明 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

十点

☆◎ かなかなやシートにたたむ日の匂ひ

一灯 (そ・万・孤・彦・五・千・允・啓

・く・亜)

(☆…中七を「シートにたたむ」か「たたむシートに」か迷うところです。繊細な感覚を佳く詠

込んでいると思えます)

九点

ほたる火の乱れて闇を深くせり

孤舟 (堅・そ・猛・五・龍・灯・允・啓

・三)

六点

お祭の舞ひ手揃ひし大舞台(藤間流の会)

紀久男 (堅・五・敏・隆・正・く)

☆◎ 大一番うちわの動きふと止まり

保明 (恭・万・孤・千・敏・灯)

(☆…「ふと」では弱いので「はたと止(きみ)」。うちわ↓うちは・団扇)

☆ 切り口のありてこそなれ水羊羹

亜也 (猛・万・彦・弘・千・三)

(☆…中七↓「在(ある)こそ佳(よ)けれ」)

五点

◎ あぢさゐの喜怒哀楽の色に咲く

昇 (堅・そ・猛・孤・敏)

四点

☆ ずしさを窓辺でうけて歳時繰る

猛 (堅・眞・万・啓)

(☆↓涼しさを窓辺で受けて季寄せ繰る) (紀・孤・灯:「歳時記」は字余りになるので「季寄せ」)

☆ 雨の輪とあめんぼの輪の重なりぬ

孤舟 (眞・万・弘・允)

(☆↓あめんぼの水輪へ雨の輪を重ね)

☆ 迎へ火のちりちり赤き糸となり

弘子 (啓・く・亜・天)

☆ ソーダ水手話にて語る二人連れ

亜也 (万・保・隆・正)

(☆…中七が説明的なので↓「二人連れ手話交しつつソーダ水」)

三点

◎ 兒の笑顔米粒ほどの蝸牛

天牛 (堅・孤・保・三)

☆ 町内会子供みこして活気づき

そらお (万・彦・正)

(☆↓「町内会子供神輿で活気付き」)

☆ あぢさゐの一朵(だ)を惜しみ残り残し

全 (猛・ゆ・啓)

☆ 魂のまだ残りある蛇の衣(きぬ)

孤舟 (五・正・天)

☆ 夏休みラジオに合はせその場跳び

五郎太 (紀・万・隆)

☆ 白雨来てさらりと富士を隠しけり

弘子 (猛・恭・く)

☆ 部屋ごとに我が家はラジオと扇風機

健介 (眞・そ・龍)

☆ 亡き友の我を呼ぶ声昼寝覚

堂哉 (保・隆・允)

☆ 荒梅雨の憤怒の河を渡りけり

昇 (保・弘・天)

☆ せせらぎの岩食(は)むところ鮎跳ぬる

啓子 (万・灯・三)

二点

(☆…中七に対して「せせらぎ」は不相応に思う。↓「鮎跳ぶや溪流の岩を噛む処(ところ)」)

☆ 梶子(くちなし)の一枝手折る駈路かな

そらお (ゆ・隆)

☆ 七十年国の節目や暑き夏

全 (猛・敏)

☆ 夏木立生き物覆い安んぜよ

猛 (恭・三)

☆ 北からのたより今年もさくらんぼ

全 (千・く)

☆ 梅雨晴や碧空切り裂く茜雲

全 (堅・恭)

☆ 片陰の風を頼りにバスを待つ

恭延 (隆・允)

☆ 徘徊の老女の住まひ木槿落つ  
病む身には夏掛を傍に雨の夜  
忠彦 (紀・亜)

鳥の声ビルに木霊(こだま)す梅雨の明  
闇深し蚊遣り瞬き風走る  
全 (万・敏)

淋しがりの携帶ずらり梅雨電車  
白犬の何叱らるる夏の土手  
全 (そ・亜)

玉音放送また聞く季節草いきれ  
分ち難き記憶焼け跡雲の峰  
全 (紀・彦)

立ち話またねと小走り夕立かな  
吾が魂の宿るさそり座蛩飛ぶ  
堂哉 (恭・正)

◎ 絵付師の白き指先汗うなじ(マイセンにて)  
白帆張るポトルシツプや灯の涼し  
ゆたか (弘・龍)

鉄風鈴鳴るや太宰を身ほとりに  
全 (孤・啓)

焦げ匂ふ飯盒飯やキャンプの火  
星涼しバリの神様下りて来る  
一灯 (弘・天)

☆ 川蟹を追ふや幼き吾の影  
とつぷりと夏の帳(とぼり)の裏の闇  
全 (ゆ・く)

☆ 数寄屋めく旅所ゆかしく夏祭  
やがて逝く吾に寄り添ふひめぼたる  
全 (ゆ・天)

蝉しぐれ窓を閉めても追つてくる  
炎昼や散髪すませ句の席へ  
盛雄 (紀・保)

☆ プール帰りバス停に転ぶみつともな  
おそるおそる炎暑吟行蔭伝ひ  
そらお (千)

朝焼けのマツターホルンを仰ぎ見る  
さるすべり腕白なほど生き残り  
紀久男 (眞)

地球儀に紛争は無し星涼し  
初蝉の少し湿りし低き声  
全 (龍)

ベランダに芥残して青嵐  
夕焼けて富士は薄墨行人坂  
孤舟 (灯)

配達の鮓おつなもの夫婦酒  
夏雲やエルベのほとり古都の城  
五郎太 (灯)

☆ 菩提樹の薫るベルリン壁残る  
実朝の礁(いくりに)滾(たぎ)つ青葉潮  
保明 (龍)

◎ (「定朝」と誤記したことを気付かなかつた為、点入らず)  
七月や波静かなるペルシヤ湾  
全 (正)

夕べには木槿くるりと裾からげ  
花よりも葉を化粧せる半夏生  
全 (隆)

全力で自転車漕ぎ衝く夕立ち風  
暮れて蒸し梅雨の名残の夜の雲  
全 (千)

☆ 蛩狩床屋の主取り仕切る  
星祭英語でお喋りする子らも  
全 (亜)

◎ 包丁のいらぬ水茄子手で千切る  
真夜中の停電騒ぎごきぶりめ  
全 (龍)

☆ 無駄多き世を戒める茄子の花  
盛雄 (万)

●次回青葉会

八月二十七日(木) 午後五時半から八時半  
▲当季雑詠五句 投句二句  
九月二十四日(木) 午後五時半から八時半  
十月二十二日(木) 午後五時半から八時半

(丸紅 コンチエルト)

一 猛暑の五時すぎ、天牛さんら13名出席。投句8名。「萬緑」七月号の特集：弘子さんの新人賞ページ3枚を回覧（青史さんの句の合評も）。先ず受賞祝いの乾杯で開始。孤舟さんからの「薩州赤兎馬（せきとば）」、弘子さんからの涼しげな竹籠入り「稚鮎」（たねやのどら焼）、啓子さんの「福正宗・かがやき金沢」（北陸新幹線開通記念、純米吟醸・純金箔入り）、小生の「奈良萬」生貯蔵酒（喜多方）を賞味しつつ①万里子先生、眞希子さん付添いで伊那へ帰郷②近江八幡（江州商人、近江兄弟社のメンソレータム）③美しい日本語と季語（和菓子銘や色の名称の多さ）④三吟歌仙を始められた五郎太さん⑤芸能人の俳句（芥川賞の又吉直樹、民放TVの夏井いつき等）等々を話題にし乍ら、大いに盛り上がった次第。

二 関係者近詠

母校訪ふ繁に蕊降る老櫻

万里子

迷子犬捜す貼紙花茗荷

弘子

草は濃く木々淡々と若葉光

全

繁殖のミヤコタナゴの群れ泳ぐ

全

地震（なみ）止むや水鶏の声の甦り

全

こはごはと鹹にさはる母子連れ

紀久男

幼らとどくだみ百本抜き競べ

全

ビール干す吟行ばてて伊勢屋かな

全

還暦と米寿の母子も草を引き

全

山翡翠の水中キックダイナミック

全

祖母の味桑の若葉をお清汁に

全

噴水の天辺にある平和かな

盛雄

ジャスミンや別れ難なの真夜開き

全

梅雨寒の静寂の中へ寄席ばやし

全

初つばめお帰り景色は大変はり

眞希子

積乱雲大志挫けしときもあり

健介

若葉揺れ敬語とにきびの中学生

全

他人事とギリシア笑ふや雲の峰

全

蔦茂る曾祖母までの祖は知れど

全

泣き出せる空へ微笑む花菖蒲

全

夕風や覆面パトカー大サイレン

全

オペ前の友と仰ぎし雲の峰

紀久男

生れてもう保育園児や鯉幟

全

白靴の園児らわざと泥道に

全

人の足踏みて過ぐ鶏八十八夜

弘子

翡翠の青き残像眼間に

允章

あるならん月光を待つ白牡丹

全

暁にことさら匂ふ百合の花

全

草田男へ触るる泉へ手を入るる

全

玫瑰や白き航跡まつすぐに

全

初蝶と紛ふ葉擦れや若葉風

青史

芍薬の紅ふかぶかと開きけり

全

端居とふ鼓あり鼓に閉ぢこもる

全

人去りし家に紫蘭の群れ咲いて

全

柿若葉見上ぐる妻にみどりの斑

全

打ち水や恩師夫妻を待つ小家

堂哉

回廊の素足なにかを踏みにけり（永平寺）

全

老境の昼寝楽しき日々来たる

全

松緑の「丸橋忠弥」

紀久男

青蘆や湖賊の墨の崩れ居て

全

汗みづく殺陣の激しく美しく

青史

余花朗や虚子の乾したる冷酒かな

全

天金のセルバンテスに雲母虫

全

旧き書体でパソコン教室夏つばめ

彦十

遣り過ごす日傘を深く深くして

全

言い訳の頼りの雨や麦酒干す

全

「萬緑」

在間千恵

十薬や官邸庭師の若きこと

全

スタンドに小傘キラキラ梅雨晴間

額紫陽花介護合間のやすらぎに

全

全

三 八月歌舞伎座は「三津五郎に捧ぐ」と冠し、舞踊二題「棒しばり」と「芋掘長者」を上演中です。

啓子さんは坂東流名取の免状を書いておられ、小生は「楽屋句会」で三津五郎と御一緒しました。

最近、目にした他結社の追悼句を四句紹介します。

・ 散りつづく梅の梨園の計のまたも

今井千鶴子

（「ホトトギス」7月号）

・ 梅白し喪服の列の絶えぬまま

いしだゆか

（「爽樹」7月号）

・ 「大和屋！」の声は尽きなし春灯

全

（全）

・ 猫柳喜撰法師と揺れ比べ

増田明美

（「俳句」6月号）

尚、戒名に俳号の爽壽（そうじゅ）の二字が入っております。

以上

紀久男記